

池大雅家譜の研究

森 銑 三

一

蕪葭堂雜錄所載の大雅堂年譜に誤謬の多いことは、今では大雅研究家の等しく認むるところとなつてゐる。然しこれまでは他に代ふるべき何者もなかつたために、幾分の不安を感じながらも、依然としてこれを使用しなければならぬ状態にあつたのであるが、昨年七月から四箇月に亘つて、雑誌南畫鑑賞で大雅の特輯號を出したのに、大阪の森繁夫氏が大雅堂雜考と題する一文を寄せられて、その藏弃に係る池大雅家譜といふものの紹介をせられた。それは蕪葭堂の養子石居の編んだもので、その中から新事實の知られて來るものが相當に多い。私は大雅堂年譜以外にさやうの資料の存在してゐたことを始めて知つて、意外な資料の出現を悦ばずにはゐられなかつた。それで機會を得てその一見を得たいと思つてゐた矢先に、某社からの依頼を受けて大雅の小傳を執筆することになり、起草にかゝつてから數々の疑問に逢著した末に、書を飛ばして特に右家譜の借覽を請うた。森氏は快諾の上、

直ちにそれを郵送して貸與せられた。私は居ながらにしてその書を披閱することを得、それを骨子に蕪稿を纏め上げることを得た。これは偏に森氏の厚意に依るものだつた。然し小傳では、紙數の制限のために、家譜の内容と年譜その他の資料との比較研究などをしてゐる暇がなかつた。依つてこゝに家譜そのものの研究を主題とする一文を草して置いて見たいと思ふ。

池大雅家譜は、表紙を併せて墨附十六葉から成る片々たる小冊子である。それで最初はその複本を一部作製して置いてよいと思つた。然るに著手して見て、その計畫を放棄せざるを得なくなつた。同書には轉寫の誤が極めて多くて、判讀にも堪へ兼ねる部分があり、且つ石居の編んだ原本そのものも、覺書の程度を出ない未成書であつたらしく、記述の體を成してゐない點が多い。それでこゝには判讀の可能な部分だけを原文のまゝに出しながら、それに私見を加へて行くことに方針を改めねばならなかつた。

但しそれに先立つて、この家譜と年譜との關係を一言して置かなく

てはならないが、年譜もその家に傳へられてゐた兼葭堂の手記の類を曉晴翁が整理して編次したといふのであるから、それだけ信用を置いてよい筈のものであるが、それはもともと一時の雜記に過ぎなかつたのを、晴翁が見出して、形を整へて年譜の體にしたものらしく、その手を加へた折に、分り切つた誤謬なども生じたものではあるまいかと思はれる。そして晴翁が木村家の記録の類を調べた時には、この家譜の原本は目に觸れなかつたのであらう。もしこの家譜のあることを知つたならば、兼葭堂雜錄に收めるのには、當然年譜を捨て、これを取るべきであつたのに、そのことをするに及ばなかつたのである。そして誤謬の多い年譜のみが世に知られ、別にこの家譜の存することは從來殆ど閑却せられて今日に至り、そのために大雅堂の研究が阻害を來されてゐたとも見ることが出来るのである。

二

翁者享保八癸卯五月四日生、幼名又次郎ト云。本姓藤氏、而其先京師北山ミヅロ池村人也。名金右衛門ト云。法名松岳居士ト云。代々百性也。^(一)其村中ニ、同名金左衛門成者兩人在テ、壹人者山ノ方ニ居ス^(二)ヲ以、山ノ金左衛門ト稱ス。今壹人者池ノ端ニ以居ス。池ノ金左衛門ト稱ス。翁者則池ノ金左衛門ノ子孫也。依之性ヲ池野ト改ム。其子嘉左衛門、京師兩替町銀座中村氏ノ下役ヲ勤ム。相續ス。其後中村氏譯上^(三)有^(四)テ、銀座役退去ス。其時池野氏モ俱ニ退、寺ノ内千本通ノ邊ニ住ス。翁四歲、時ニ父嘉左衛門死去ス。其後母ト俱ニ同所ニ住ス。

家譜はかやうに書起されてゐる。大雅の生年月日は、墓碑銘とその逝去を告知した刷物とに據つて右の記載の正しいことが證せられる。年譜では、杜選にも生誕の日よりしてこれを誤つて、八日としてゐるのである。

大雅が幼名を又次郎といったことも、他の文獻の記載と一致する。

池野氏の家系に就いては、從來全然知らるゝところのなかつたのが、こゝにこれだけでも判然したことを、大きな悦としなければならぬ。大雅の祖父金左衛門の松岳居士の法名は、淨光寺の過去簿に松岳宗壽居士と見えてゐる。池野の氏の由來は、いかにも右に記すところの如くだつたのであらうと思はれる。大雅の父の嘉左衛門の名を、年譜ではまた嘉右衛門と誤つてゐる。父嘉左衛門が銀座と關係を有したことは、立原翠軒の手記に、「大雅堂は幼名又次郎と云ふ。池野氏。銀座手代の子にて」云々としてゐるのと一致する。父嘉左衛門が大雅の四歳の時に歿したといふのも、右に據つて始めて明になつた事實である。

享保十三年、翁六歲也。知恩院古門前袋町ニ住ス。其近邊ニ香月茅庵ト云人ニ素讀ス。

年譜では、「六歲、當年ヨリ十一歲迄、三條寺町養拙門人清光院淵ニ書ヲ學ブ。古門前茅庵ト云人ニ素讀ス」となつてゐるが、その茅庵の香月氏だつたことが、右に據つて始めて知られるのである。清光院淵といふ書道の師のことは家譜には全然見えてゐないが、この人は後出の清光院一井を誤つて出したのであらうとは、小笹喜三氏がその書

家大雅堂師承考（南畫鑑賞昭和十三年七八月號所掲）に述べらるゝところであり、私もその意見に左袒したい。

同十四年、翁七歳、三條川端檀王寺内清光院一井ト云人ニ書ヲ學フ。一井ハ寺井養拙門人三上治郎左衛門ト云人之門人也。此時翁池野子井ト號ス。

檀王といふのは三條寺町なる梅檀王院の略稱である。一井はその寺中の清光院の住僧で、名を慧徴、字を良信といひ、忍觀と號した。別に聽泉堂とも號し、自ら一井と稱した。善書の聞え高く、就いて學ぶ者が多かつた。この年五十七歳になつて居り、大雅に長ずること五十歳だつた。右一井のこともまた小笹氏の研究に據る。

其年春、黄檗山堂頭梅和尚ニ贈大文字、又和尚贈所在詩。二首在、左ニ記ス。

次に大梅の「鄙辭貳章賦贈池野又次郎童子」とした七律二首があるが、これは既に知られてゐるのであるから省略する。なほ養拙の條に、「名子共、住京師、佐々木志津摩門人也」といふ分注が加へてあるが、これも略した。以下も同斷とする。

又次郎心覺之書、其マ、出ス

七歳（花押）

享保西拾四年二月□□□七歳ニテ書也。

享保十四年十月十五日、二文字屋御取次ニテ、黄檗山堂頭和尚池子井被召出、細字大字仕ル。依之和尙様ヨリ御詩御墨御筆二枚、□□ヨリ御詩大字被下、□□□御詩被下。

右者翁七歳ノ時書也。墨ノ字立郭無之、全小兒之時之書トミユ。又七

歳ト云字ノ下ハ花押ト見ユ。此書京師鳥羽萬七郎所持。

原本にたゞ空白にしてある箇所に、見計らつて□を宛て、置いた。

石居の稿本には、大雅の書の模寫があつたのか、或はそれを載せる豫定だけで、載するに及ばなかつたのか。何れにしてもその縦の一畫を缺いた墨の字は、今見ることを得ない。

大雅と黄檗山の諸僧とのことは近世崎人傳にも記されてゐるが、それには誤傳のあるのが、これに據つて正される。鳥羽萬七郎は、名を聰、臺麓と號する。大雅堂とも交際のあつた人である。年譜には、全然この年の條の記載を缺いてゐる。

但し年譜には次に、「八歳、薩摩人山名主計、號潜庵、養拙流。此ニ從テ書ヲ學ブ」といふ一項があるが、それは却つて家譜にはない。この山名主計を薩摩の人としてゐるのは誤で、實は伊勢の人であり、名を靈淵、號を僊龍といつた。右は人見少華畫伯の著「大雅堂を中心に其一」に據つて知つたところであるが、小笹氏は大雅がこの僊龍に學んだといふ記載に疑問を抱いて、或は二條城番與力の隠居で御家流の書家だつた金原潜龍に學んだのが誤り傳へられたのではあるまいかとせられる。但しこの一項は家譜に見えてゐないことでもあり、その點にはなほ考究の餘地があるかも知れない。

享保十九年、翁十三「十二」歳也。綾小路麩屋町内藤靜舟ト云人ニ素讀ス。

このことは年譜にも殆ど同文の記載があるが、それにはなほ「纔ニ一年也」といふ一句が添うてゐる。

次に年譜には、「十三歳、三條梅檀王院寺内清光院一井ト云人ニ書ヲ學ブ。一井ノ門人故ニ□ト云印アリ。一井ハ養拙門人三上次郎右衛門々人ナリ」といふ一項がある。□は印形で、中に「池野子井」とある。即ち年譜では、一井に書を學んだのを七歳の時のことにしてゐるのが、これでは十三歳のことになつてゐるのである。

元文二年、翁十五歳也。此時俗菱屋嘉右衛門ト名改ム。二條樋口ニテ母ト共ニ居ス。別而孝心也。此時始テ畫扇ヲ賣初。唐畫ヲ扇子ニ畫ス。尤倣八種畫譜、號袖龜堂。友人望月照溪ト漢畫法ヲ「學?」。號玉海（分註。則玉海ノ號ヲ付。柳里恭之號、玉桂ノ玉ノ字用ユ。尤里恭名ツク）此時翁扇子店ノ看板在。則左ニ出ス。此節書ヲ桑原爲溪ニ學フ。

扇 肆 聯

招來停當箇々仍々日本的扇子、圖得齊整品是唐山樣畫圖

秦熙載松室式部書

右翁草稿眞書

柳里恭の命するところに依つて玉海と號したとあるが、これは翌年以後のことだつたのではあるまいかと思はれる。扇肆聯には誤字脱字がありさうであるが、そのまゝにして置く。人見畫伯の「大雅堂を中心」に第二に、富岡鐵齋翁の模寫した待賈堂の店の圖があり、それはわざと支那風に畫いた實際には遠いものであるが、上に「待賈堂」とした額があり、兩方に聯があつて、その下位に「日本的扇」「唐山樣畫」としてある。その文字は、右の扇肆聯中のものだったのである。その聯を書した秦熙載こと松室式部は、松尾神社の祠官で、當時に於ける聞人の一人だつた。

年譜にはほゞ同文の記載があつて、「十五歳、友人望月照溪ノ好ニ因テ畫法ヲ學ヒ、爲溪ニ書ヲ學フ。書店ヲ開キ、畫扇ヲウル。初メ唐畫ヲ扇ニ畫ス。八種畫譜ニ倣フ。袖龜堂ト號ス。二條樋ノ口ニテ母子二人也。池耕、字子職、號爲龍」としてある。書店を開きの一句は家譜の方にはない。耕、子職、爲龍等の名字號は、家譜にはなほ後になつて見える。

望月照溪のことは、また小笹氏の紹介せられた以文會筆記の記載に據つて、當時知名の書家だつたことが知られるが、同人は寛文八年の出生で、この年既に七十一歳の高齡だつた。呼ぶに大雅の友人を以てするには、あまりに年齡の隔りがあり過ぎる上に、照溪がその高齡で漢畫に志したといふのも受取りにくい。これは畸人傳に見えてゐる望月玉蟾と混同したのではあるまいか。但し玉蟾もこの年既に四十四歳になつて居り、大雅と友人關係に在つたとは見難いが、この二人が同時に漢畫の研究に志したといふは、必ずしもあり得べからざることではなかつたであらう。そこでまた家譜を見直すと、「號玉海」の次に行を改めて、「望月照溪、號玉蟾子、守謙齋、住京師」としてある。即ち家譜の編者石居も、照溪と玉蟾とを混同してゐることが知られ、かたがた以て右の照溪は玉蟾のことではないかと思はれるのである。

桑原爲溪は畸人傳にも出てゐる高逸の士であつた。この年六十二歳になつてゐた。

元文三年、翁十六歳也。同所居ス。印彫店ヲ出。翁彫所石印、我家翁所持ス。其二三ヲ與ニ出ス。此時翁初テ柳太夫ニ謁ス。

此時里恭初テ翁ノ才智ヲ知ル。其後翁郡山へ行テ、柳太夫ノ家ニ三年客タリ。時ニ先生ニ問畫法。在彩色ノ法。名里恭山水三〇者、南紀祇園餘一極山水畫法、依テ里恭ノ紹介ニテ、翁南紀エ行テ初テ謁ス。此時南海先生所藏ノ内、陳無名畫含山縣八山圖ト云唐刻ノ墨本見〔示〕ス。翁始テ此帖ヲ見テ、山水ノ畫ニ志厚ナリテ、此帖ヲ假テ山水ノ法ヲ學フ。其頃里恭先生ヨリ、我家父巽齋ノ伯父紫園ナル者へ所贈里恭先生書簡左ニ記ス。

次に里恭の長牘が載せてあるのであるが、それが殆ど一行も満足には読み難いのを遺憾としなければならぬ。大雅堂の刻印數顆がその後載せてあるが、これも大體の模寫で、印文も判じかねる。右の本文中にも意の通じない箇所があるが、原のまゝに出して置く。

二條樋口の家で、扇店の傍ら印刻をも業としたことは、清田儋叟の孔雀樓筆記にも見えてゐるし、前に引いた鐵齋翁模寫の略圖にも、聯に竝んで「石印彫刻」と大書した看板の掛けてあるのに據つても明かである。

大雅が里恭と識つたのはいつだつたか。それに就いては異説が多いのであるが、年譜の方にも「十六歳、當年初テ柳大夫ニ逢」としてあり、それはこの年のことだつたとするのが正しいのではあるまいか。里恭の許に三年間客となつてゐたといふのは、それより二十歳頃までの間のことだつたのであらう。里恭の紹介で紀伊に祇園南海を訪うたのは、なほ後年のことだつたのであるが、その年次が判明しなかつたためにこゝに併せ出したのであらう。里恭はこの年三十六歳である。

其頃翁池耕、字子職、號爲龍居士、霞庵、待賈堂。此號芥川養軒名ク。

芥川養軒が命じたといふのは、待賈堂の號をいふのであらう。養軒は寶永七年に生れて、大雅に長すること十三歳だつた。

寛保元年、翁十九歳也。初テ高孟彪ト友タリ。此節清人伊孚九歸唐年也。又漢天壽トモ友タリ。

年譜には、「十九歳、當年高孟典ト友トナル。孟典ハ芙蓉ノコト也」とあるのみで、天壽のことには觸れてゐない。この年芙蓉は二十歳、天壽は十五歳だつた。

同二年、翁廿歳也。移居聖護院村、此時名池勤、字公敏、號九霞、大雅堂、竹居。移居詩左ニ記ス。此時ノ印面左ノコトク、

公敏	當世	竹居	此印アリ。又號東皐。
父	畫奴		

移居の詩といふものは「左ニ記ス」とあるのみで、擧げてはない。年譜にはこの年のことが、「二十歳、聖護院ニ移ス。大雅堂ト號ス。池勤、字公敏、號九霞、俗稱菱屋嘉左衛門」としてあつて、菱屋嘉左衛門の通稱がこゝに至つて見えてゐる。

寛延元年、翁廿六歳也。柳太夫ノ紹介ニテ、家父初謁先生。家父十三歳也。贈先生詩文、又翁與家父贈所之詩文別在。

このことは年譜にも「廿六歳、當年兼葭堂十三歳、初テ面會ス」としてあるが、それは里恭の紹介だつたことが右に據つて知られるのである。

同二年、初而富士山登ル。秋江戸へ行キ、奥州松島遊フ。

同三年、越中立山、加賀白山へ登ル。此前後宇佐八幡參テ、九州ニ遊、年アリ。

寶曆元年、翁廿九歳也、再加賀白山へ登ル。此時高芙蓉同伴ス。加州ニテ字戴成、號霞樵、三岳ト改ル。

都合で三年間を續けて出した。この間のことは、年譜には、「廿七歳、初テ富士山ニ登ル。東都ニ遊ヒ、松島ニ到ル」「廿八歳、越中立山ニ登ル」「廿九歳、白山ニ登ル」としてあつて、簡略にはなつてゐるが、その記載が合致する。但し現存してゐる大雅の畫蹟の印に、「戊辰登不二、己巳登立山、庚午登立山」としてゐるものがあり、右の家譜と年譜との記載は、すべて一年づつ遅れてゐるものと見なければならぬ。戊辰は寛延元年、己巳は二年、庚午は三年だからである。なほ寛延三年の冬には紀伊に遊んで、始めて祇園南海を訪うたことが、南海の詩文に據つて明かにせられる。家譜の元文三年の條に南海訪問のことを出してゐるのは實はこの年だつたのである。なほ大雅が三十歳以前に九州に遊んでゐること、その頃既に芙蓉と共に白山へ登つてゐること、加賀滞在中に字號を改めたことなど、大いに注意すべきものがある。

年譜の後には、大雅が一生を通じて用ひた名字號を纏めて出し、その最後に「池無名」として、「字貸成、廿七歳ノ時東武松嶋ニ遊ヒ、翌年加州ニ趣トキ池無名ト改ルト云。或ハ加州ニテ改名ストモ云」として居る。やゝ漠然とはしてゐるが、この記載も家譜の方と併せて、注意を要する。大雅の無名の名は、南海の命するところだつたとは田能

村竹田が屠赤瓊瑣錄の中に記してゐるところであり、從來それが通説となつてゐたのであるが、寛延三年七月、即ち紀伊に南海を訪問する數月前に金澤に於て作つた畫に、「庚午秋七月偶寫於金澤疎竹居、貸成池無名」と款してゐるものがあつて、南海に會ふ前に、既に名を無名、字を貸成と改めてゐたことが確實にせられるのである。なほこの寛延三年の秋金澤に在つた事實からも、家譜と年譜とのこの年の記載が一年遅れてゐることが知られよう。

同二年、紀州那智山登ル。歸路ニ若山再南海老人問「訪」テ、再含山縣八山圖ヲ借りテ學ブ。此時先生此帖ヲ與フ。雅翁悅テ家ニ歸リ、彌山水之極意「脱字アラン」珍藏ス。其後此帖ヲ與我父。藏久シ。余于今珍藏。家父歿テ後、此帖携京師鳥羽臺麓先生、乞跋、則左ニ記。

臺麓の跋文はそこに掲げてあつて、その大意を取ることが出来るが、なほ脱字がある。これは大雅關係の資料として、いふに足るほどのものがない。これも省略に附することとする。

年譜には、「三十歳、當年熊野エ詣テ、南海先生ニ謁ストモ云」としてあつて、更に次に、「三十一歳、始テ南海先生ニ畫法ヲ受ク」としてあるが、南海は寶曆元年大雅二十九歳の九月に歿した。寶曆二年三年に大雅が南海と交渉を有したやうに、家譜年譜共に記してゐるのは、共に誤だつたとなければならぬ。然らば家譜の第二回の南海訪問のことは全く抹殺すべきかといふに、私はこの條もまた寶曆元年の條に擧るべきが、一年遅れて記されたものと解する。再び南海老人を訪ひ、再び含山縣八山圖を借りて云々として、再の字を繰返して書い

てゐるのに留意すべきである。

右之畫譜ヲ得テ、陳無名ノ陳ノ字除テ池無名ト改ム（分註。此號南海先生名ツク）。

この條の記載の誤れることは既に述べた。

此前後江州日野知人在テ、求翁畫扇。則數本認持行ニ、望人壹人モ無之、早速持歸リ、瀬田橋ヨリ湖中エ投ス。則我畫龍神依求贈ル云。

大雅が自畫の扇面を琵琶湖に投じた逸話は畸人傳に據つて名高いが、それはこの頃のことだつたらしい。

此頃娶玉蘭。翁老母存生中ハ、依孝心妻女ヲ不向（迎）、老母死去後娶玉蘭。此頃老母死去見ヘタリ。

記載は簡單であるが、この一條も大雅の研究上に大きな光明を投じてくれるのを悦ばねばならぬ。從來は延享三年大雅堂二十四歳にして玉蘭と結婚したとせられてゐたのであるが、それは贋作に係る兼葭堂の追憶記に依據したもので、私等は全然從ひ難しとする。なほその母は、淨光寺の過去簿に至心妙誠信女といふ婦人が寶曆九年大雅三十七の歳に歿してゐる記載のあるのがその人に擬せられてゐたのであつたが、それもたゞ推定に止つて、なほ疑問の餘地なしとせぬ。私は舊稿大雅堂遺聞（本誌昭和十一年二三月號所掲）に於て、逢原紀聞その他の記述よりして、大雅は母の歿後に玉蘭を迎へたのであらうといふ推説を立てたのであつたが、家譜の記載はそれを裏書してくれることになるのである。大雅は三十歳前後にして母に死別し、その後玉蘭と結婚したるものと見てよいであらう。

其頃ハ翁祇園下河原島井前神福院ノ内ニ居。其前後翁遠足ノ節者、諸事雜司ハ二條通書林文錦堂預ル。（註。林伊兵衛）

文錦堂林伊兵衛と大雅とのことは、なほ何かに出てゐたと思ふが、檢出することが出来なかつた。

右寶曆三年ヨリ十年迄六箇年ノ事實不見。後考俟ヘシ。此前後ヨリ清人伊孚九ノ畫法學ブ。

年譜の方も、寶曆四年より九年まで何等の記事もない。

同十年、翁卅八歳也。六月廿八日再加州白山、越州立山登ル。秋信州戸隠山、同淺間岳、上州荒舟山、甲州金峰山ニ登ル。此頃ハ高芙蓉、漢大年同伴也。

寶曆十年は有名な芙蓉、天壽との三岳登攀の年であるが、何故か右には富士山を逸してゐる。年譜には、「六月廿七日ヨリ白山、立山、戸隠山、淺間山ニ上ル。荒舟山、富士八級ニ至ル。芙蓉、大年同伴ス」としてあつて、これに富士山も加へられてゐるのを探るべきであらうか。大雅等が京都を發足したのは六月二十七日だつた。これも年譜が正しく、家譜の日は一日遅れてゐる。富士山は八合目まで、頂上を窮めることを得ずして下山したことは、天壽の紀行に據つて明かであつて、右の年譜の記載は正しい。但しその天壽の紀行といふものは今いづこに傳へられてゐるか、明かでないといふ。

同十一年、再六月十八日ニ富士山ヘ登ル。秋七月秋葉山、蓬萊寺（山）、江州伊吹山ニ登ル。號水也道人（分註。水ノ字者池ノ字ノ略ノ字也）

年譜には、「卅九歳、六月十八日富士ニ登ル。七月十一日歸路。秋

葉、蓬萊寺、伊吹ニ登ル」としてある。この年の旅行に就いては他に聞くところがない。

同十二年、翁四十歳也。春芳野ニ遊、其時ノ詩左ニ記ス。

就中芳野好春深。最好山花得我心。幾度看來又看去。今年望處去年尋。

年譜にはこの年の記事を缺いてゐる。

右者翁四拾年ノ間事實ノ内、家父留置再寫出ス。此外奇事雖在、年月前後不詳、只家父老母之依咄記ス。家父云、翁者平日高山へ登ル事ヲ好ム。依之山水畫極妙、實翁者山水之生「精？」也トイヘリ。或トキ翁我家ニ遊歴ス。時長崎ノ人東海嘉藏成者ト、同時我ニ遊居ス。此人醫者ニテ翁ト交深。而翁同伴京都登、西家ニ居ス。其後東海氏長崎歸ル。其翁節作歌アリ。本調子ニ上リ、

東海の上使日本へ渡り、唐が戀しゆて、永のくの長崎の住居。扱其後に都へ登り、唐が戀しゆて、西のくの西の岡住居。

翁唐人ヲトリト云事在。左ニ記ス。

イ、イニサイ異國ノイジユンテンイラ、イツラーカイサラボテン反ダ
ルマノマナコ玉、南蠻木綿十六反、南京もめん三反半、トテ手ヲツカ
ヘテ、御目とふござん、ト云テ立。

右之歌ハ何ノ事カ不分、全翁ノ戯ト存ス。(分註。此一件ハ家母ノ咄ニ

ヨツテ記)

大雅が音樂に興味を持つてゐたことは他に據つても知られるが、唐人踊といふやうなことをもしたといふのが珍しい。一面謹嚴で一面飄逸な人だつた大雅は、時に踊を踊つたりしたのである。

明和七庚寅春、家翁浪華天王寺中町龍泉寺ニテ書畫會ヲ爲ス。京師及浪

華諸名家集。尤其前池翁(へ)モ以書報ス。翁其時江州圓滿院宮依召、在宿不居。夜ニ入テ歸ル。玉蘭右之書簡ヲ見(示)ス。翁急キ浪華へ下ル。

餘リ急テ筆箱ヲ爲失念。後ヨリ玉蘭右筆箱ヲ持テ翁追テ、伏見稻荷邊ニテ追付テ筆箱渡ス。翁是者□カ不存、大ニ御世話、ト云ハレタ。扱其時大雨ニテ、夜行ニテ浪花へ下リ、家父ノ表ニ立テ、簑笠ニテ何事カ云人アリ。家僕非人ト心得、手ノ内ナシ、ト云。得トミレバ池翁ナリ。家僕赤面シテ去ル。扱其日龍泉寺展觀ノ序ニテ池翁ノ畫左ニ記ス。紙本竹巖新霽圖、淡彩一幅、右題字左ニ出ス。

竹巖新霽圖は現に傳へられて居り、その森嚴の筆致に於て、大雅の作品中でも異彩を放つてゐる。その題記も既に研究家の注目するところとなつてゐるものである。こゝにはまた省略することとする。

年譜の方は、明和二年より八年に至る七年間を「此間無奇話」として居り、その次には、その歿する安永五年に飛んで、「五十四歳、四月十三日罹病卒于葛原艸堂、葬于船岡淨光寺」としてゐる。家譜の方にはその終焉の年の記事を缺いて居り、竹巖新霽圖の題記の次には、大雅が蒹葭堂に贈つた七律一首、蒹葭堂が大雅に贈つた七古一首、大雅の「寄高氷壑」の七絶一首を載せてゐるが、何れもまた省略に従ふ。氷壑は芙蓉である。

池翁祇園ニ而書畫有之

彭百川、岡野元震、武山人、殿正義、煥章堂、鎌田源二郎、高芙蓉、宮奇、佐野内膳(分註。大雅社中)、此外略

家譜にはまだかやうな記載がある。不明の人が多くて、その書畫の會といふはいつのことだつたか判然しないが、その内に彭城百川や宮

崎篤圃の名の見えるのがなつかしく、百川のあることに據つて、少くも寶曆二年大雅三十の年以前だつたことが知られる。百川は寶曆二年八月に歿してゐるからである。百川と大雅との交渉に就いては、南海が手記した畫論を百川より大雅に傳へ、大雅がまたそれを野呂介石に贈つた事實が四碧齋畫話に據つて知られるが、更に新しい資料の出現に依つて、この二人の關係を今少し判明せしむることは得ないものかと思つてゐる。

なほ右の人名中の殿正義は即ち博古齋亞岱こと殿村平八であり、大雅の水流帖を刻した人である。同書の高保青陵の序の中に、大雅が書畫を善くしながら、それを刻本とせられることを好まなかつたことについて、「亞岱山人其親友也、善刻印章、乃竊彫鐫其水流帖以作墨本」云々とあり、更に安永四年に成つた正義の自跋に、「余與池無名舊好三十有餘年」云々としてある。これに據つて大雅はその二十歳前後にして、既に正義と識つてゐたことが知られて来る。

池翁加州金澤ニ逗留舊者三絃ヲ聞テ作。

閨に窓うつ時雨もよいわいな、獨ねざめの「座敷に」。ゆかりおもへば、茄子もよいわいな、色も一しはむらさき。

「座敷に」の一句は、古今名家眞蹟集に據つて補つた。

次に大雅の逝去を告知した刷物の寫が出てあり、次に大雅が三歳にして書いた「金山」の二字が雙鉤で出しており、次に黃檗山の杲堂が七歳の大雅に與へた七絶一首が載せてあつて、この家譜は終つてゐる。

家譜の本文はこれを紹介し終つたが、同書は外題に「池大雅家譜」とあり、その背面には、「大雅堂池氏家譜全。原本兼葭堂藏書、後本洛下唐扁木藏書、丙午五月燒失スト云」とあり、更に「此原本、予借于中村生、轉貸于庄邑生、生因寫之、生沒後歸予手、原本龍文堂借讀、遂燒失、古雪齋識」としてある。丙午は弘化三年である。庄邑生といふのは、小笹氏が畫家大雅堂師承考の中に引いてゐられる庄村葭中であらう。そしてその葭中の文の中に大雅堂家譜としてゐるのは、即ちこの池大雅家譜のことだつたのであらうと思はれる。

家譜にはなほ表紙の次に、兼葭堂の畫いた葛原草堂に於ける大雅夫妻の圖の模寫があるが、これは森氏の大雅堂雜考の中に圖版として挿入してあるから、それに據つて知られたい。

池大雅家譜を通覽する時、それが大雅堂年譜に比して量の多いのみならず、記載の確實性に於て、遙かに年譜の上にあることが知られるであらう。但しその中に間々誤謬の存することも既述せる如くであるが、大雅堂に就いて、これだけ内容のある記述をして置いてくれたものを他に見ない今日、この家譜は大いに珍重すべく、それに就いても編者石居の努力を多としてよいであらう。なほ今後新資料の出現すること、それをこの家譜に照合して記載に検討を加へ、一層正確な大雅の年譜を作成したいものである。

終に臨んで、家譜を貸與して研究の便宜を與へられた森氏に、重ねてその厚意を謝する。(昭和十四年一月十日稿)